

子どもの印象からみた親への 理解と要求

室谷 幸吉

〈例・1〉

うちのおかあさんは、なにかっていうとぼくのせいにはしません。勉強をすこしでもやらないとおこります。おかあさんは、あわてんぼうです。ごはんがこけても、よその家だとおもってこがしてしまいます。

そこで、ぼくたちがねているとき、おかあさんはすぐおこします。ぼくは、おかあさんに、「まだ六時じゃあないの」というと「あ、そうだ」といってふとんにはいる。ぼくがテレビをみると、いけなしいと、つれていってしまいます。おかあさんは、ぼくがよりみちをしないうっていても、よりみちしたという

おこります。

おかあさんは、ガがきらいです。ぼくが新聞がみにガをつつんで、おかあさんのところへいってみせると「ワッ」といってげていきます。とてもおもしろいです。

おかあさんはあんみつがすきです。食堂にいくと、あんみつをとります。食

おかあさんは、おばあちゃんのくすりやを手つだっています。

ぼくが帰ると、たいていはいません。

ぼくはおかあさんに、クリスマスに小がたしゃしんきをかってもらいます。

この文を通して、この子が母親と、生活的にどのようなふれ合い、どんなかかりあ

いをもっているかが、ある程度うかがえる。

すべての子どもらにとって、母親は「心の支え」であり、父にも増して「よき人」であろう。そうであることが望ましい。だが、それは母に対する無条件肯定などというアマイものではないようだ。その人を慕いつつ、その人に心ひかれつつ、慕うがゆえに、心ひかれるがゆえに、なおさら他面では、さまざまな批判や要求を、その人に向かつて抱いている。

前の一文でもよみとれることだが、子どもは母に対して、相当肯定的であるとともに、また相当に否定的でもある。母との間に、生活行動を通して、かなりの緊張状態や問題点をもっている。

子ども自身の立場や、真意を正しく汲みとっていてくれない、母親の独断的・一方的態度に不満のことはをもらしている。(カベをよごすのはぼくではないのに、ぼくがよごしたんだときめている。学校帰りにヨ

り道なんかしないのに、ヨリ道して来たと勝手にきめている)勉強に干渉する口やかましきにも反発姿勢をほのめかす。

——ああだこうだとぼくにうるさく干渉するおかあさんにだつて、しくじりはあるぞ……と、逆にやりこめる。復讐めいた心の動きでそれみたことかと、母の失策や弱点をひろいあげる。(こはんのこげるのをトナリの家のこととまちがえたり、時間を見誤つて早く起こしたりというそそっかしい)そこらに、「あまりえらそうなことはいえませんが」という反撃の気配が感じられる。

親という地位の前でも、子どもらは必ずしも無力なものではない。

今日の子どもが、自分たちの親を、どのように理解しているか、また親に対して、どのような欲求や不満をもっているか等、一般に、親に対する子どもの姿勢に批判的態度といったものを観察することは、今日の子どもを正しく理解する上に、欠いては

ならない大事な手だてである。

しかも、こうした追求は、単に今日の子どもの感情や行動の傾向を浮き出させてくれるだけではなく、家庭内における、時代に即応した人間関係の樹立、新しい家庭秩序を作りあげるための出発点を明らかにしてくれるものでもある。

私は、六歳の男女約百人(幼稚園卒業期から、小学校初学年にかけての一般情勢がうかがえよう)についての、概数二百篇にわたる親への印象記録を入手して、それについて検討を加えてみた。それをとりまとめたのが、この報告である。

子どもたちの家庭は、主として東京山の手(武蔵野市・三鷹市・杉並区・世田谷区)にあって、中流の生活をしており、なおその九割ほどは、会社勤めのサラリーマンであった。

ここに、家庭内の人間秩序を考察する上に問題視される点が、いろいろ浮き上ってきた。その二、三について所見を略記しよ

う。

★

「あなたのおとうさんは？ おかあさんは？」と、話題が両親に及ぶとき、子どもたちが、ふっと思ひうかべる両親の姿——自分の母らしい、自分の父らしい、特長的な行動は、一人につき平均して二項目ぐらいつつある。(印象点の総括平均からそのことはわかる)

子どもらがあげた父母の印象的行動は実にさまざまで、多岐にわたるが、一応これを、つぎの八つに類別することができた。

- ・父と母との対人関係に目を向ける。
- ・自分に対する父母のシツケ・態度に目を向ける。
- ・父母の親切さに目を向ける。など(次頁の表参照)

さて、この八つの対象領域について、子どもらの関心の集中状態を見ていくと、父親については——

物品購入に関与する人としての関心が最

父・母に対するこどもの印象

印象方向 父 母 男 女 別	父と母との 対人関係を 向ける		自分と母との 関係に目を 向ける		父母の親 切さに目を 向ける		物の贈与 に目を向 ける		父母の働 きに目を 向ける		父母のクセ (主に短所) に目を向 ける		父母への 願いや批 判をもつ		服装やそ の他の雑 行為に目 を向ける		一人当り の印象事 項数	
	男	女	男	女	男	女	男	女	男	女	男	女	男	女	男	女	男	女
父につき	男	36.9%	15.8%	21.0%	57.9%	21.0%	31.6%	5.3%	10.5%	2.0								
	女	15.4	—	53.9	69.3	7.7	15.4	15.4	15.4	1.9								
	平均	26.2	7.9	37.5	63.6	14.4	23.5	10.4	12.9	2.0								
母につき	男	—	18.8	—	56.2	75.0	6.3	12.5	6.3	1.8								
	女	21.4	7.1	7.1	42.8	35.7	—	64.2	28.6	2.1								
	平均	10.7	12.9	3.6	49.5	55.3	3.2	38.4	17.5	1.9								
総平均	18.5	10.4	20.6	56.6	34.9	13.3	24.4	15.2	2.0									

も大きく、第二は、父の自分に対する親切さ、(ことに女の子にこの傾向が強い) 第三に、母に対する行動、(主に夫婦ゲンカの際をとる) ついで、父のクセ・父の仕事ぶり等となっている。

母については、父への印象度とは順位にかなりのズレが認められる。すなわち、母の働く姿についてがトップに、二位が、父の場合首位にあった、物の贈与者としての母、三位が批判に基く母への願いや訴え(父の場合は第七位)となり、ついで母の服装や日常雑行為に対するもの、さらに、自分へのシツケの態度、父に対する人間関係(主に夫婦ゲンカで、父の場合はこれが第三位。夫婦ゲンカについて母親は受身の立場にあるのであろうか)等となっている。

父母をひっくるめてみると、首位は物品贈与者としての親であり、二位は働く親の姿。そして三位は批判的な親への願いとなり、以下、父母の親切さ、服装や雑行為への印象、父母の人間関係(夫婦行動)、父母

のクセ、自分へのシツケの態度等に、それぞれ強い印象をいだき、それから広く深い人間的影響をうけつつあることがうかがわれる。

〈例・2〉

うちのおかあさんが、そうっと、ぼくにわからないようにおかしをたべています。すぐぼくにみつかつてしまいました。それで、ぼくが「ずるいぞ」というとわらいます。ぼくが勉強をして、本をよんでいると、おかあさんがへただよという。そうするとぼくは勉強がいやになります。

この子は、母のちょっとした行為に、きびしいことばで抗議している。(実は、この子の母は持病の胃下垂で、その病気ゆえに、食事の時間を平常通りにキチンときめておくことができず、空腹を感じたとき、何かでうめておかないと、苦痛にたえられないという特殊事情があるのだが……)

このように、親の行為に、批判的な目をむけ、善悪の評価づけをし、さて、「だからこうしてほしい」「こうする方がいいと思

う」と、願望の形で、ことを親になげかける——といった傾向は、男の子より女の子にあきらかに強い。すなわち父母につき男子は八・九%なのに対し、女子は三九・八%と高率である。

しかも父に対する批判願望より、母に対するそれの方がはるかに多い。すなわち母の行為に対する批判願望率は、男の子の場合でも父へのその二倍半、女の子の場合では、実に四倍強という数字を示している。

たとえばこうだ。

・おかあさんはハルヨ（妹）ばかりめんどうみて、わたしのことがまっつてくれない。わたしのこともめんどうみてほしい。

・弟ばかりかわいいがる。

・わたしがお手伝いするといっても、女中さんがいるので、おかあさんは手伝わせたくない。

・おかあさん、私の洋服ばっかり作らない

でちょうだい。私モッチャんにいじめられるから、私のばっかり作らないでネ。
・朝六時に起こしてネって、たのんどくの、ねてておこしてくれないの、こまります。

・ピアノのおけいこにくる人にはとてもやさしいのに、私にはやさしくない。おけいこにくる人にするように、やさしく話したりしてほしい。

・おかあさん、おとうさんみたいにふざけてください。

・すぐ私の貯金かしてというのでいやだ。

——以上は、母に対する女の子からの願望。その女の子が、父親に対しては、

・おとうさんはケチンボだ。なにかたのんでも買ってくれない。

・妹にしつこくするのはイヤです。

といった調子で、父に対しては採点があまい。

・おかあさんは、おばあさんよりずっとこ

わい。おばあさんみたいにやさしくして……。

・あわてんぼでこまります。

男の子から母親への願いはこんな具合で低調だ。父に対しても同様である。

女の子の姿勢には、どうやらシット的な色あいがうかがわれる。女性特有の感情を主とする生活の動きや物の理解の仕方などが、自然にこういう現われをしているのだと思う。

★

〈例・3〉

おねがい。パパとママとけんかしないでね。いつも私は、けんかがはじまるとママのみかたになってけんかをしています。そうするとママがいいです。「とうちゃん、よしなさい。ミツ子よしなさい」といいます。マクラをなげたり、ネマキをなげたりします。

父が母に対し、母が父に対する人間関係が攻撃的行動・対立行為（夫婦けんか）の形で、子どもらの心に、強い印象を刻みつけていることは注意されねばならない。

いったい、ゆたかな人間愛にもとづく夫婦の協力生活が、子どもらの身边で行われることが少ないのではなからうか。

一時の激情にかられた親のはしたない姿は、子どもに目に止められて、何の効果もないものだ。効果どころか、いたずらに子の胸の中に不安の波をわきたたせ、親へのケイベツ感を誘起するだけに終る。

夫婦ゲンカは、子どもらの目にふれぬ場所、子どもに影響を及ぼさぬ形で行う、という忍耐深いルールを、夫婦間に設けることはできないものか。これは世間の親の良識にかかわる問題である。

★

物品の贈与をうけた感激や喜悅によって、親への印象を深めていることは、まことにほほえましい。これは、生活的に親への依存期であり、経済的には無能力に近いスネカジリの存在者として、むしろ当然のことでもある。

「王様の子でも食につく……」心ひかれる

のは、しかし食いものばかりではない。

・エンビツ・エンビツケズリ買ってね。

・クツを買ってください。

・るすばんをしているからパンを買って

ね。

・オデンを買ってほしい。

・本買ってもらってうれし。

・動物園へつれてってほしい。(以上男の子

から母へ)

・下ジキ・ぼうし・けしゴムかってね。

と父親の心につき。子どもらのこの種のオネダリは、母親に向かってより、

一般に父親に向かっていいやすいように見

うけられる。男の子の場合は、父に対して

も母に対しても、ほぼ同数の率(五六―五

八%)を示しているが、女の子の場合に

は、母親については四三%、父親について

は六九%と相当父親の方へ濃厚な傾斜を見

せている。子どもにとって、おかあさんの

財布のヒモは、なかなかとかせにくいも

のようだ。

・るすしていたのでハンカチ二枚・アメ・
チョコレートをもらった。

・オモチャをかってください。

・お人形を買ってね。

・長クツと、マンガ本買ってよ。

これは女の子から母親へのおすがり。ま

た女の子から父親に対しては、

・お金をくれるのでうれしい。

・おまんじゅうを買ってください。

・映画につれてってください。

・アメを買ってください。

・手帖やチョコレートくれます。食堂に

いってアイスクリームやそばをたべさせ

てください。

・クレパスを買ってください。

・本や千代紙人形を買ってください。えんそ

くにはキャラメルやリングを買ってくれ

ます。

といっている。

★

・足をケガしたとき赤チンをぬって手あて

してくれて、親切なおとうさん。

・スリキズしたとき、おとうさんはすぐ救急箱もってきてくれ、手あてをしてくれた。

・赤・青のエンピツを買ってきて、ぼくのねているマクラ元においてくれた。

・おかあさんがいなかったとき、ドブにおちたぼくのクツを洗ってくれたりした。

と、自分に対する父の親切さに感動している子が、男では二一%。

・おとうさんは私をタッコしてねてしまう。

・ネマキを着かえさせてくれます。

・おとうさんは私にとってもやさしい。

・病氣したとき、おとうさんはオブラートに薬をつつんでのませてくれた。

・カゼのときなんか、よくせわをしてくれます。

・「早くねなさい」と気をつけてくれる。

・おかあさんがねていると、おとうさんは自分でいつも雨戸をあける。親切なのが

すきです。

など、女の子では五四%ある。

ところが、母に対してのそれは、わずかに女の子に七%あるだけで、驚くほどに少ない。(おかあさんは、私にやさしいです)

これは、いろんな点から検討に値する現象だと思う。

★

父母の働く姿に対する印象は、必ずしも「深くして強い」とはいえない。生活の在り方として健全なものとはい切れない。

母の働く姿から強い印象を受けている子は、父についてのその約四倍(五五・三

%)あるが、

・おかあさんはいつも着物をぬつている。

・いつも電気洗たく機で洗たくしている。

・弁当作ったり、そうじやせんたくでおかあさんはたいへんです。

・ごはんのしたくでつかれるでしょう。

・あみものばかりしています。

・うんといそがしくてくたびれるでしょ

う。

・おふろたきをしている。(以上男の子)

・学校から帰るといつもぬいものしてている。

・洋服を作っていてせわしそう。

・お弁当作りやそうじやせんたくでたいへんです。

・日比谷の会社についてお菓子屋をしています。

・とてもせわしいです。(以上女の子の印象)

ということばにうかがえる通り、九分九

厘までは、直接生産活動とはいえない、こまごました家事労働に限られている。

一般に都会の子らは、真剣な勤労場面、

家族の火の出るような生産労働の場面に接

することが少ない。そういう切実な人間生活の最前線にふれる機会に恵まれない。家

庭内職などを必要としない階層の子どもで

はなおさらである。したがって本当の意味

の勤労や労働——人間として最も必要な、

それなしには人生の意義を失うところの、切実な職業活動に対する認識は皆無に近く、それへの意識や関心はおそろしく低調である。これは子どもの精神生活にとり大きな不幸といえる。

都会の子どものための人間成長にとって大きなマイナスである。そしてこれは、しばしば償い難い、心の傷を生みだす源ともなっている。

子どもの家が、商店である場合でも、商人である親たちは、つとめて子どもを自分の店から遠ざけようとする姿勢を示す。

「なにしろ、店の方は人の出入りがはげしく、あわただしいものですから、おちついて勉強などしちゃいけません。なんとか、そのうち、つごうして、静かな住宅地に住居をみつけ、子どもらをそっちに移したいとは思ってるんですけど……」と、その父親、その母親たちが、これこそは最上の策といった顔つきでおっしゃる。

くだもの屋の店で、そば屋の店で、電気

器具の店で、なぜ子どもらの目と手と心を、店を中心とする商行為に参加させることによつて（もとより行き過ぎは警戒しなければならぬが）たくましく賢く生かそうと心組まないものであろうか。まことに解

せない親心である。学問に対する古風なかたよった観念が、親心の正しい発現をあやまらしめているといつてはいいすぎであらうか。

オトナが唯一の「憩いの場・遊びの場」と考えている家庭に、勤労を通してのみ味わわれ理解される人生の厳肅さ、生命の充実感などを、引き入れる工夫はないものか。

家庭の「望ましい秩序」は、この面からも痛切な今日の問題として検討されなければならぬ。子どもらの将来の幸福を考えれば考えるほど、親である私たちにとつて、これは努力と工夫とを要する大問題であらう。

・おとうさんはぼくの頭をゲンコツでゴリゴリするのでいやだ。

・おふろにはいらぬというところごとくハダカにしてむりやり入れる。（以上男の子から）

父親の自分に対するシツケ方については、ある。これが母親に対してのものでは、

・おかあさんは手紙をかいてるとき、ばくがあげられるとすぐおこる。

・勉強しないとうんとおこる。

・テレビを見るなといつてうるさい。（以上男）

・弟をいじめるとひどくおこります。（女）
といった調子である。

つぎに父と母との対人関係について、三ひろつてみよう。

・おとうさんの帰りが遅いと、おかあさんはサツサとねてしまいます。するとおとうさんは帰ってきてうんとおこっています。

・おとうさんは、お酒をのんでよっぱらっ

て帰る。そしておかあさんのことしかつていません。

・ばんごはんがおそくなると、おとうさんはすごくおこります。

・おこると障子を破り、茶ワンを投げつけます。(男の子の目に写った父)

・おとうさんはときどきおかあさんとケンカします。

・茶ワンやそらのものをなげてこわします。

・マクラやお茶ワンをなげてあぶない。

(女の子の目に写った父——)

それが母の側から父への手出しとなる
と、

・おとうさんと映画にいき、帰りがおそいとおかあさんはしかります。(女の子) といった工合に激しさが減っている。

★

子どもにしてみると、両親は、それこそ「理想の人」であらう。

「父のごとく」また「母のごとく」ありた

い……と、子どもに願われる親でありたいというのが、これまたまじめな親たちの願いではあるまいか。

なんとかして子どもらの期待にそむかない親でありたいと私は思う。

親の服装や雑行爲について——

・おかあさんは毎日十時にねないと眠れない
いそいで、十時になるとチャンとねます。

・私のおかあさんはいつも着物きています。

・パーマをして伊勢丹へいきます。(以上母へ)

・家ではいつも着物ですが、会社へいくときは洋服にかえます。

・小さいとき本をよみすぎてメガネかけたそうだ。(以上父へ)

(筆者は明星学園教諭)

越年の言葉

平安短大保一 B A子

(前略)

今、こうしていると、思い

出されるのは、始めて幼稚園へ参観にいったときのことである。「子どもの世界」は清く、美しい。私は、あのときの空気
の味を、今もはっきり思い出される。この
ようなところで働ける私は幸福である。

私はしばらくの間思いにふけり、除夜の鐘で我れに返った。一つ、二つ、……

一九五六年は、鐘の音に乗って消えていく。それにつれて、私の心は、希望に燃えてくる。

〔鑽〕流れいくリズムに乗り切ってその中に没入した極、自分の意識が無くなったところからその流れの起源に還(かえ)らせて、曆の上の越年を真に新しい躍進として踏み出し立ち直る「道」が立つのである。毎朝地球上に新しく生れて来たような幼な心に、元日はみんなが立ち還るから、「おめでとう」と祝祭の清気が漲り、内心にあかりマタイ伝がとも六ノ三二が点る。

(三三、二、一八、夜十一時) 大塚喜一記